多治見市文化財保護センター企画展

多治見の上絵付

はじめに

明治時代、多治見(旧多治見町、以下同)は陶磁器の集散地として活気にあふれていました。町の中心地を東西に走る下街道沿いには20軒以上の陶器商が軒を連ね、仕事を求めて他地域から移り住んできた者も多く、にぎわいを見せていました。

陶器商が多くあったことで、多治見では上絵付業が盛んになっていきます。陶器商は本焼きした陶磁器を土岐や市之倉、滝呂などから買い付け、注文主の依頼やその時々の流行に応じて上絵付業者に絵付けを依頼しました。明治時代終わりから大正時代の初めには多治見の上絵付業者は129軒、画工は370人いたといわれます。その後上絵付は赤絵銅版や転写などの技術革新を経て多治見の特色となっていきます。本展覧会では多治見の活気あふれる時代とともに上絵付の歴史を紹介します。

江戸時代の上絵付

日本の上絵付の歴史は、江戸時代初めごろ中国明から赤絵が輸入されたのち、九州有田で酒井田柿右衛門が赤絵の焼成に成功したことに始まるといわれます。赤絵は秘法でしたがすぐに京都の仁清に伝わりました。上絵付は、赤・黄・緑・紫・青など彩色の多い様子から当時より「色絵」や「赤絵」と呼ばれていました。

明和 6 年銘入色絵蓮文香炉　明和 6 年(1769) 個人蔵
底面「明和六己丑年八月吉日　大畑加藤氏」

江戸時代に美濃で作られたとされる上絵付資料はごくわずかで、また古文書史料にもほとんど記述が見られません。言い伝えでは 19 世紀半ばごろ、西国出身の出稼ぎ職人・法師治兵衛から上絵付の話を聞いた多治見村本郷の窯屋大岳茂平が研究の末に成功したことがはじまりとも、同時期に上絵付をはじめたという同村の堤万助が最も古いともいわれます。

しかし残されている資料には、大畑町の旧家に伝えられた明和 6 年（1769）の銘入り香炉をはじめ、18 世紀中頃～ 19 世紀前半と考えられる緑色が基調の上絵付陶器が数点みられ、また陶芸家荒川豊蔵が大畑で採集した上絵付陶器皿も伝わっています。これらの上絵付陶器について荒川豊蔵は「灰釉であり素地はその土地（大畑）のものである。伝世の香炉もそこで絵付けしたもののように思われる。（見つけた皿や香炉は）京都の仁清系統の絵付けなので、古清水と見誤る人もあるがこれは確かに美濃で焼かれたものである。」と京焼の影響があるとしています。17 世紀後半以降、瀬戸美濃窯では腰錆（こしさび）茶碗、御室（おむろ）茶碗などの京焼風の製品を生産していますが、上絵付陶器に関しても京焼などの影響を受けつつ生産されていたと考えられています。

御深井釉色絵小皿　江戸時代中期～後期
多治見市教育委員会所蔵

上絵付の担い手と出稼ぎ職人

19 世紀以降は美濃で磁器生産がはじまり、生産量が増大していきます。主な販売先は江戸や大坂などの都市で、徳利や染付製品が主力商品でしたが、上絵付製品を江戸へ販売した記録もわずかながらみられます[1]。

この時期に数人の上絵付職人が尾張や美濃へ出稼ぎに来て活動していたことがわかっています[2]。また、大畑町の北野神社に奉納された上絵磁器御神酒徳利には赤色の上絵具で「天保 12 年」「九州肥前国大村領彼杵郡上波佐見中尾皿山住人　奉納願主　中尾寿助」「大畑邑」と書かれており、波佐見（現長崎県）からの出稼ぎ上絵付職人が多治見で活動していたと推測できます。

天保 12 年銘　上絵磁器御神酒徳利
多治見市教育委員会所蔵

江戸時代の美濃の上絵付は、他国からの出稼ぎ職人がその担い手であったと考えることができます。18 世紀には京焼などの影響を受けつつ微少ながら展開され、幕末になると出稼ぎ職人より技術が伝えられて、明治時代の多治見の上絵付へと継承されていきます。

明治時代の多治見と上絵付

明治 5 年（1872）に陶磁器の生産・販売が自由化すると、多治見は陶磁器集散地として発展を遂げていきました。文化 7 年（1810）に 1522 人であった多治見の人口は、明治 14 年（1881）には 3500 人に増加し、明治初年の多治見の村別宅地等級は、可児・土岐郡内で 2 番目に高いことから、急激な繁栄ぶりがうかがえます[3]。

上絵磁器寿文皿　個人蔵

そのような中で多治見では上絵付業者が多く開業しました。幕末に上絵付を始めた大岳茂平の子が小路町で、堤万助、加藤宗吉が中町で、加藤亀太郎が本町でそれぞれ開業しました。中でも、堤万助は代表的な上絵付業者だったと伝えられています[4]。同 10 年（1877）に加藤亀太郎が上絵具製造に転身すると、それまで秘法であった上絵具が自由に供給されるようになり、上絵付業者が増加していきました。大正時代の初めまでには多治見の絵付業者は 129 軒、画工は 370 人にまで増えていきます。

西浦焼上絵磁器 SP セット
多治見市教育委員会所蔵

博覧会へ！

明治政府は国内の産業・工芸の技術を向上させ殖産興業に結びつけるため、万国博覧会や内国勧業博覧会の開催に力をそそいでいました。同 10 年の第 1 回内国勧業博覧会では、県内からの出品者 25 名のうち上絵付出品者はわずか 2 名でしたが、同 12 年（1879）のシドニー万国博覧会では県内全 331 件の出品のうち、上絵付製品は 90 件ほどに増加しました。滝呂の松原栄助、多治見の堤万助、西浦清七、西浦市兵衛からの上絵付出品が多くみられました。

西浦焼を創始した西浦圓治は同 21 年（1888）に自宅前の屋敷を上絵付工場に改造し、絵付の腕のあった大岳彦兵衛に工場を経営させました。翌年には一流の絵付工場の多かった名古屋へ移転し、60 名ほどの職工で西浦焼を製造しました。この年西浦圓治はパリ万博で銅賞を受賞、その後国内の博覧会などで常に上位入賞を果たしました。

赤絵銅版・石版転写の開発

明治時代の名古屋は多くの輸出陶磁器会社が開業し、九谷や各地から腕のよい画工が集まっていました。美濃は名古屋を支えるべく白素地の納入が中心的な仕事となりつつありました。多治見の加藤小三郎は美濃での生産を高めるため、従来の下絵銅版の製版・印刷法、器面への貼り付け法なども研究を重ね、同 28 年（1895）に上絵銅版転写技法を完成させました。上絵銅版は「赤絵銅版」と呼ばれ、黄、青、緑などで色だみや水金が施されました。中でも着物姿の女性の美人画は、大正時代にかけて輸出の主力製品として中国などへ販売されました。

赤絵銅版美人画皿　多治見市教育委員会所蔵

石版転写は多孔質石灰石の吸水性を利用した印刷方法で、舶来の石版転写はありましたが高価でした。同 34 年（1901）、小栗国次郎は転写用紙や器への貼り付け糊材を研究し、苦心の末ようやく実用化に至りました。石版転写は昭和 30 年代に写真製版などが取り入れられるまで、写実的で多色の量産絵付法として利用されました。

上絵付の研究と技術継承

大正時代以降にはゴム版絵付も普及し、量産を可能とする上絵付技法が開発されていきました。そのような中、大和絵画家・林雲鳳らが絵画講習会「画友会」を発足し、かつて西浦製陶所の画工であった多治見工業高校教諭・井口哲郎を講師に陶画技術の向上を目指しました。その後画友会は陶磁器産業に質することを趣旨とし、昭和 14 年（1939）に「多治見陶磁器意匠研究会」へと発展しました。太平洋戦争中の休会を経て、同 21 年（1946）には再び絵画講習を中心として発会、戦後に設立された多治見上絵加工組合で継承され、同 52 年（1977）には水墨日本画教室と改称されました。

また、戦後の需要回復にともなう絵付技術者養成が急務となり、多治見上絵加工組合理事長の安藤秀二らが中心となって同 25 年（1950）に「上絵意匠研究会」を発足させ、広小路通りの洋裁学校の一室で毎週日曜日に夜間講義を実施しました。受講者は技術向上の機会もなかった組合員の絵付業者で、油絵やゴムスタンプ、漆蒔（うるしまき）技法などの絵付実習が主でしたが、陶磁器デザイナー日根野作三らを招いての講義もあり好評であったといいます。翌年には「美濃焼上絵付研究所」となり、この研究所が現在の多治見市陶磁器意匠研究所へと継承されていきます。また、同 27 年（1952）に結成された多治見、駄知、泉、土岐津、肥田、瑞浪土岐の 6 地区の岐阜県陶磁器上絵加工工業協同組合連合会では上絵加工技術者の育成に力をそそぎ、上絵意匠展や新作展などの事業を推進しました。昭和 50 年代には労働省の技能検定制度を取り入れ、上絵付技術の向上とイメージの高揚、さらには技術保存と後継者育成指導を図ることを目的に、上絵付 1 級技能士の認定をおこないました。

多治見市無形文化財　上絵付　技術保持者　佐分利利成　（平成 14 年 7 月 26 日市指定）

佐分利利成氏（1931-2014）は、昭和 24 年（1949）に家業の上絵付加工業に従事するかたわら、広範な上絵付技法を修得されました。特に手描きで洋画風の絵付を行う油溶き技法による作品は高い評価を受けました。手描きによる上絵付の技術が衰退している中で、氏の持つ広く高度な上絵付技術は貴重なもので、後継者の技術指導にも尽力しました。

佐分利利成　上絵薔薇絵 16 インチ白磁大皿
多治見市教育委員会所蔵

【主な参考文献】
・林雲鳳「大和繪に生きる」1980
・多治見市「多治見市史　通史編上」1980
・岐阜県陶磁器上絵加工工業協同組合連合会「美濃上絵陶業三十年史誌」1984
・多治見市「多治見市史　通史編下」1987
・大日本窯業協会「日本窯業史総説第 3 巻」1991
・多治見市役所農林商工課「美濃焼情報誌 MINOYAKI たじみ第 5 号」2000
・多治見市役所農林商工課「美濃焼情報誌 MINOYAKI たじみ第 10 号」2005

謝辞（敬称略）
安藤洋二　大竹和男　小木曽郁夫　各務正博　各務和子　春日美海
加藤寛治　加藤泰久　高木典利　中嶌茂　古田文彦
荒川豊蔵資料館　多治見市図書館郷土資料室　多治見市美濃焼ミュージアム
多治見陶磁器上絵加工工業協同組合　土岐市美濃陶磁歴史館　瑞浪市陶磁資料館

註 1　西浦家文書№2437「江戸水揚げ荷物売捌きの次第申上げ状」
註 2　西浦家文書№1924「美濃表より呼び返しの色絵職人書上覚書」
註 3　西浦家文書№3405「岐阜県下宅地等級」
註 4　国立国会図書館所蔵「美濃国土岐郡製陶器書上帳」（明治 5 年）

多治見市文化財保護センター企画展パンフレット
「多治見の上絵付」

展示期間・場所　令和元年 7 月 16 日（火）～ 12 月 27 日（金）
多治見市文化財保護センター展示室
発行　多治見市教育委員会・文化財保護センター
〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘 10-6-26
TEL(0572)25-8633 FAX(0572)24-5033
URL https://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/
発行部数　600 部（印刷費用　60,000 円）（税抜き）